

あ　と　が　き

ここに『東南アジア研究』第4号の編集を終える。京都大学東南アジア研究センターの出版計画の実施も順調に進んでおり、6月には所報の第1号が出版されたが、本誌も季刊誌として1周年を迎えるに至った。当研究センターの研究成果はひとえにこの出版計画を通じて真価が世に問われるわけだから、定期刊行物としての本誌の使命は特に大きい。今後も少なくとも季刊の線はくずさず、さらに将来は研究センターの発展によっては隔月刊とすることも計画中である。

しかし、われわれは既刊の各号に必らずしも十分に満足しているわけではない。内容・体裁ともまだまだ検討の余地がある。このような雑誌の編集には、旧号の方針をそのまま踏襲する方法もあるけれども、われわれは良いことは可能な限りすべて実行するという基本方針をたてて、改良すべきはすべて改良し採るべき新企画はどしどし採用することにした。本号でもすでに改められた点が少なくないが、特に次号からはいくつかの新企画を実施する予定である。

本号の内容の主なもの、総論的なもの、言語学的なもの、農業、森林土壌、医学事情にかんするものなどであり、地域としてはタイにかんするものが多い。本誌はもともと、高度の水準を保ちつつ、東南アジアに関心をもつものなら誰でも興味深く読めるということを目指しているものだが、はたして本号がそれを実現しているかどうか。個人による判断の相違もあってむづかしいことにはちがいないが、やはり再考する余地があったのではないかと反省する。これは編集するもの問題にとどまらず、当研究センターに関係するもの全員がいかにして共通の問題意識をもちうるかということにかかっている。今後執筆される諸氏にもこの点とくに留意されるようお願いしておく。

いつものことながら、本誌のために執筆された諸氏に対して色々と御迷惑をおかけした。とくに前号に掲載予定の西田龍雄氏の論文が本号に、本号に掲載予定の木村康一・口羽益生両氏の論文が次号にまわされたことには各氏におわび申さねばならない。また、印刷の図版や活字についての困難な注文や再三にわたる変更をも気やすく引受けていただいた中西印刷にはお礼を申しあげる。

東南アジア研究センターの発展にとって大学院生諸君の活動は大いに力強い。現地調査や留学のほかにHRAFの整理には桂満希郎君が、所報の編集には荻野和彦君が参加するなど業務面での活動もある。

本号の編集にあたっては、三谷恭之君の労を煩わし、編集業務の大半と次号以下の企画など諸事に参加してもらった。もちろん責任はいっさい編集委員が負うものである。

当研究センターの現地調査計画にしたがって現地調査を行なったものが研究例会で発表後必らず寄稿するという原則のほかに、どしどし投稿を歓迎する。論文・報告・図書紹介の別を問わない。ただし、その際、うえに述べたことと本号に掲載した投稿規定は必らず守っていただきたい。次号の原稿締切日は8月10日である。

本誌の発展は東南アジア研究センター自体の発展のひとつのメルクマールであると同時に推進力である。各位の御協力を期待する。もって編集後記にかえる。(編集委員)